

軍事郵便40通が語る 過酷な「戦争と人生」

歴史学・新井ゼミ生 送り主の遺族に聞く

新井勝紘ゼミ(文学部人文学科歴史学専攻・ゼミ生31人)は、戦時中の軍事郵便を読み解き、戦争を考える実習を行っている。このほど4年次生が1年半にわたって読み進めた書簡の送り主の遺族にインタビューを行った。戦争体験を死の直前まで引きずった送り主の過酷な人生を知った。

4年次生7人が解読中の書簡は、送り主が「衣川賢太郎」さん。封書や絵葉書など40通で、第二次世界大戦中の1941年前後、満州(中国北部)の陸軍部隊から富山県射水郡の知人・富田賢子さんに送ったものだ。

「きれいな字で読みやすいが、最初は旧字、崩し字に四苦八苦でした」と市村基裕さんは話す。



▲軍事郵便の「衣川書簡」。はがきに「検閲済」のスタンプが見える

「戦友達の遺骨を持って帰りましても其(そ)の遺骨に対し心から頭を下げて呉れる人たちが少なくなってきたことは甚だ悲しく存じました。」「そろそろ秋虫鳴き初めました。現地では粟や高粱などすっかり実って其の取り入れに急いでいます。」「(書簡から)

文面には、戦時中の一兵士の心情が生々しく記される一方、草花などの自然描写や趣味の写真についてもつづられている。ゼミ生は「芸術を理解する教養のある人」(野村健一郎さん)という印象を持った。

賢太郎さんの生い立ちは？ 手紙を書いた後、どんな人生を歩んだのか？ 賢子さんとの関係は？

ゼミ生は読み進めるうち次々浮かぶ疑問を判明させようと1年ほど前から身元調査を始めた。その結果、賢太郎さんは残念ながら2004年に92歳で亡くなったが、兵庫県朝来市在住だったと判明、一緒に暮らした子息の古川春馬さん(45)との面談が実現した。6月30日、4年次生の青沼大輔さん市村さん、野村さんと新井教授の4人が朝来市の古川さん宅を訪れた。

春馬さんによると、1912年生まれ、京都・福知山出身の賢太郎さんは、20年近い軍人生活を送った。満州から直接沖縄戦に参加、捕虜となって終戦を迎え47年に復員した。戦後は朝来市で農業を営み、4人の子どもに恵まれた。

春馬さんが明かす賢太郎さんのエピソード一つひとつに、ゼミ生は何度も言葉を失った。「人と会う時は背筋をまっすぐ伸ばし、まず敬礼だった」「亡くなる直前、かつての戦友の名を呼び、近くを探し求めた」。市民も巻き込み、し烈な地上戦となった沖縄戦を戦った様子を「私たち子供には一切、話そうとしなかった」……。

青沼さんは「賢太郎さんは亡くなるまで、戦争をずっと引きずっていた。戦争は人間の人生を翻弄するとあらためて思う。やりきれない気持ちになりました」と目を伏せた。

亡くなる5年前に自分史を書き、沖縄戦の体験は短歌に残した。暮らしや自然へのまなざしを文章に託す姿は、満州時代から変わらない。4人が手を合わせた賢太郎さんの遺影は、激烈な戦いを体験した様子は感じられない、穏やかな姿だった。

この面談実現は、3人をはじめとするゼミ生の執念のような調査が実を結んだ。

昨年、書簡受け取り主の賢子さん(84)を探し当て面談。賢子さんは富山県内に嫁ぎ、賢太郎さんとは、手紙でのやり取りだけで戦後会うことはなかったことが分かった。しかしそこであきらめず、賢子さんと電話で連絡を取り続け「(賢太郎さんは)福知山に関係があった」という一言を聞き出した。福知山の衣川姓に端から電話で当たった結果、ついに賢太郎さんの身元が判明した。今後は賢子さんに再度、聞き取りを進める予定だ。

新井教授は「肉親から直接、戦争体験者の“人生”を聞くことができたのは、粘り強い調査を続けたたまものだ。今後の書簡解読に弾みがついた」と期待している。

新井ゼミは、2年前、やはり第二次世界大戦中のビルマからの軍事郵便「小泉書簡」を読み解いた成果をもとに展示会を開催。「現代の学生が戦争と真摯に向き合った企画」と多数のメディアに取り上げられ話題になった。さらに「小泉書簡」「衣川書簡」などの成果を来春、出版の予定だ。

※軍事郵便＝戦時中、出征中の軍隊や軍人、軍属などと本国の人との間で取り交わされた郵便物。もっぱら私信で、表には「軍事郵便」「検閲済」というスタンプが押される。

経済・塚本篤史さん、文・木村真衣子さん

音楽を通じ“ごみゼロ”活動中

身近な問題に目を向けよう

4年次生の塚本篤史さん(国際経済学科)と木村真衣子さん(日本文学科日本語専攻)は、音楽イベントを通じてごみ問題に取り組んでいる。

二人は国際青年環境NGOで野外イベントの環境対策を推進する「A SEED JAPAN」(<http://www.gomizero.org/>)のごみゼロナビゲーションのコアスタッフ。同会の活動で偶然知り合った。

塚本さんは2年前、国際経済学科・海外特別研修などでオーストラリア、タイ、カンボジアを訪ね、貧困問題や環境問題に興味を抱いた。「やってみたいことはたくさんあるが、まずは身近な問題に取り組もう」とSEEDの活動に加わった。

室井義雄ゼミのロックグループ「チーむ」ではボーカルとギターを担当。歌謡曲からビートルズまで幅広いジャンルを持ち、自主コンサートも開いている。音楽とかかわりを持つことが参加の後押しとなった。

「音楽のある空間が好き」と言う木村さんは、1年次の総合科目で、フェアトレードやNGO活動に目覚め、SEED活動に参加するようになった。「自然破壊に結びつく目の前の問題に関心な人が特に若い世代に多い。使い捨てやごみ削減の認識は、人任せにできない私たち一人ひとりの問題」と強調する。

活動は、野外コンサートや自治体主催の環境イベントで来場者に持ち帰り用のごみ袋を配り、ごみの削減・分別やリサイクル、リユースを呼びかけ“ごみゼロ”を目指す。同時に日常生活での実践を促す。

7月27日から3日間、13万人が訪れた「フジ・ロックフェスティバル07」では、3日間で苗場スキー場全体を覆うごみ箱からあふれたごみの処理に、スタッフとボランティア300人が汗を流した。

最近「どのごみ箱に捨てるの?」と聞く来場者も増え、ごみ捨てへの認識も変わってきたようだ。

「音楽によって生まれる連帯を、運動に生かそう」(塚本さん)、「知らない人たちが笑顔で手を組める運動を広めたい」(木村さん)。

二人の呼びかけで、専大生の仲間の輪も広がった。国際経済学科生を中心に十数人がボランティアとしてSEED活動に加わっている。



塚本篤史さん



木村真衣子さん



▲ゴミ分別をうながすスタッフ=フジ・ロックフェスティバルで

経営・古川翔也さん

ビデオ制作で起業

授業を“実践”できる

経営学部2年次の古川翔也さんは、高校の吹奏楽部を中心に音楽コンサートのビデオ撮影をビジネスとして始めている。

北海道北見市出身の古川さんは、高校で吹奏楽部に所属。1年生の時に地元の制作会社が撮影したコンサートのビデオを見て「自分ならもっと安くいいものが作れる」と翌年から撮影し、簡単に編集したものを仲間に配るとこれが大好評。



「高校を卒業したら起業したい」と考えていたが、自営業の父・英樹さんは「人脈を作るために大学へ」と勧めてくれたという。経営学部では2006年度一般入試から選択科目に「情報」を導入。小さいころからパソコンに親しんでいた古川さんは得意の「情報」を選択した。

▲「思い出を最高の形に」と話す古川さん

現在の肩書きは「株式会社ユーシエル ビデオ制作部部長」。コンサートがある時は地元に戻り、仲間と撮影、編集を行っている。「今の顧客は6団体程度ですが、いずれは北海道でシェアをとり、それから全国進出を、と考えています。『思い出が最高の形で残るようお手伝いすること』が使命。利益はまだまだですが、『経営管理総論』など学部で学んでいることを実践でき、授業がますます面白くなってきました」。

「やりたいことを認めてくれた両親に感謝しています。『経営』について、父とより高いレベルでディスカッションできるようになり、それも楽しみの一つです」と話している。

アコースティック・デュオ「和熊」が人気 ワンマンライブ、CDデビューも

「和熊(わぐま)」こと大熊良征さんと幸田大和さん(共に商学部マーケティング学科2年次)によるアコースティックデュオ・ライブが人気だ。マキシシングル「サンタクロースの旅」を6月にリリース、8月8日には念願のワンマンライブを開いた。

二人は出身の専大附属高校の文化祭で出会い、昨年暮れにペアを組んで活動を始めた。澄みきったアコースティックギターと息の合ったハーモニーが魅力。聴く人の心にやさしく染み入る。「歌うことで自分自身を表現したい」(大熊さん)、「型にはまらない音楽を」(幸田さん)と、作品30曲はす

べて二人のオリジナルデビュー以来、じわじわと人気上がり赤坂全角「MOVE」、原宿「JET ROBOT」など都内のライブハウス、小田急線の新百合ヶ丘駅や狛江駅での路上ライブ出演の常連になった。

8月は大阪、名古屋へライブツアーを実施。10月7日にワンマンライブ第2弾と同8日は渋谷O-EASTIに出演。



▲ライブに出演中。左が幸田大和さん、右が大熊良征さん＝赤坂MOVE